



亀中だより

No. 17 令和8年7月15日 文責 岡田



For The Students!

即行動！ “着手主義”のススメ！

「善は急げ」

「思い立ったが吉日」

「鉄は熱いうちに打て」…

どれもみなさんご存じの通り、「物事を始めようと思ったら、すぐ行動に移すのがいい」という意味です。せっかくやってみようと思ったことも、時間がたつと最初ほどの



モチベーションがなくなっていたり、なんとなくやらない理由を後付けしてみたりするものです。短い時間、少ない回数でもとりあえず始めることが、成果を上げる近道になる気がします。期末テストが終わったあと、校長室で「夏休みは頑張るわ!」といていた3年生の〇〇さん、いよいよ実行に移す時が来ていますが、あの時の気持ちを忘れてはいないでしょうか…。

2021年に発行された『「後回し」にしない技術：「すぐやる人」になる 20の方法』（イ・ミンギョ著）が韓国で22万部のベストセラーとなり、当時日本でも話題となりました。具体的なことを知りたい人はぜひ読んでみてほしいものですが、その中で著者が教えてくれることは、「成果は才能ではなく実行力で決まる」「実行力は生まれつきではなく技術である」「変えるべき言葉は「あとで」から「いま」である」などです。

夏休みは長いものですが、みなさんもすでに経験しているはずで、「あっという間に終わってしまう」ということを。「あとで」を「いま」に変えてみましょう。といってもやる気にならないんだよなあといっているあなた、始めてみれば、やる気も生まれてくることがわかるはずで、やる気があるから始められるんじゃないかと、始めるからやる気が出てくるということです。みんなが生まれる少し前、「ユーキャン新語・流行語大賞」で年間大賞を受賞した言葉にも次のようなものがありました。参考までに…。よい夏休みをお過ごしください。

「いつやるの？ 今でしょ！」 ← 誰の言葉かわかるかな？

1 学期が終わります。夏休み前におすすめの一冊から…

まもなく1学期が終わろうとしています。保護者、地域のみなさまにご理解、ご協力をいただいていたことで、無事に学期末を迎えることができました。本当にありがとうございました。

いよいよ夏休みとなります。中学生の夏休みは意外に忙しいものですが、お盆の時期を中心に家族としての時間も増えることでしょう。また、地域行事なども今年は再開されるところも多いと聞いています。家庭、地域との時間を大切にしたい夏休みとしてほしいものです。

さて、私事ですが、私は父親のいない家庭で育ちました。その環境の中で常に強くいられたわけではありましたが、ただ、大人になる過程で、そのことを理由に負けたくないという気持ちもありました。今の中学生にみなさんを見ても、様々な境遇におかれている人がいることを感じます。すべてのみなさんが、いろいろな事情がある中でも、前を向いて進んでいける、そうあってほしいものですし、学校として、その姿を支え、応援していきたいと思っています。

父親を知らない私が父親を30年やってきて、今となっては後悔することもたくさんあります。父と子、母と子、だけではなく、大人と子どもという関係においても、昔よりもはるかに子どもが尊重されなくてはならない社会です。私が親子のことを考えるとき、いつも思い出す一文があります。大人がふと立ち止まるきっかけにもなる文章です。保護者のみなさんにとってもきっと心を揺さぶられるところがあると思います。夏休みを目の前に、一度お読みいただきたいものです。次ページに掲載しますので、ご一読ください。

「父は忘れる」 リヴィングストーン・ラーネッド

坊や、きいておくれ。お前は小さな手に頬をのせ、汗ばんだ額に金髪の巻き毛をくっつけて、安らかに眠っているね。お父さんは、ひとりで、こっそりお前の部屋にやってきた。今しがたまで、お父さんは書斎で新聞を読んでいたが、急に、息苦しい悔恨の念にせまられた。罪の意識にさいなまれてお前のそばへやってきたのだ。

お父さんは考えた。これまでわたしはお前にずいぶんつくづく当たっていたのだ。お前が学校へ行く支度をしている最中に、タオルで顔をちょっとなでただけだといって、叱った。靴を磨かないからといって、叱りつけた。また、持ち物を床の上に放り投げたといっは、どなりつけた。今朝も食事中に小言を言った。食物をこぼすとか、丸呑みにするとか、テーブルに肘をつくとか、パンにバターをつけすぎるとかといって、叱りつけた。それから、お前は遊びに出かけるし、お父さんは停車場へ行くので、一緒に家を出たが、別れるとき、おまえは振り返って手を振りながら、「お父さん、行っていらっしゃい!」といった。すると、お父さんは、顔をしかめて、「胸を張りなさい!」といった。



同じようなことがまた夕方に繰り返された。わたしは帰ってくると、お前は地面に膝をついて、ビー玉で遊んでいた。長靴下は膝のところが穴だらけになっていた。お父さんはお前を家へ追いかえし、友達の前で恥をかかせた。「靴下は高いのだ。お前が自分で金をもうけて買うんだったら、もっと大切にするはずだ!」これが、お父さんの口から出た言葉だから、われながら情けない!

それから夜になってお父さんが書斎で新聞を読んでいる時、お前は、悲しげな目つきをして、おずおずと部屋に入ってきたね。うるさそうにわたしが目をあげると、お前は、入口のところで、ためらった。「何の用だ」とわたしがどなると、お前は何もいわずに、さっとわたしのそばに駆け寄ってきた。両の手をわたしの首に巻きつけて、わたしに接吻した。お前の小さな両腕には、神さまがうえつけてくださった愛情がこもっていた。どんなにいがしろにされても、決して枯れることのない愛情だ。やがて、お前は、ばたばたと足音をたてて、二階の部屋へ行ってしまった。

ところが、坊や、そのすぐ後で、お父さんは突然なんともいえない不安におそわれ、手にしていた新聞を思わず取り落としたのだ。何という習慣に、お父さんは、取りつかれていたのだろう!叱ってばかりいる習慣—まだほんの子供にすぎないお前に、お父さんは何ということをしてきたのだろう!決してお前を愛していないわけではない。お父さんは、まだ年端もゆかないお前に、無理なことを期待しすぎていたのだ。お前を大人と同列に考えていたのだ。



お前の中には、善良な、立派な、真実なものがいっぱいある。お前の優しい心根は、ちょうど、山の向こうからひろがってくるあけぼのを見るようだ。お前がこのお父さんにとびつき、お休みの接吻をした時、そのことが、お父さんにははっきりわかった。ほかのことは問題ではない。お父さんは、お前に詫びたくて、こうしてひざまずいているのだ。お父さんとし



ては、これが、せめてものつぐないだ。昼間にこういことを話しても、お前にはわかるまい。だが、明日からは、きっと、よいお父さんになってみせる。お前と仲よしになって、一緒に遊んだり悲しんだりしよう。小言を言いたくなったら舌をかもう。そして、お前が子供だということを常に忘れないようにしよう。

お父さんはお前を一人前の人間とみなしていたようだ。こうして、あどけない寝顔を見ていると、やはりお前はまだ赤ちゃんだ。昨日も、お母さんに抱っこされて、肩にもたれかかっていたではないか。お父さんの注文が多すぎたのだ。

「人を動かす」 デール・カーネギー 著 より